

新産地報告 (13)

上野 勝典*・上野 由貴枝*

New localities of some plants in Nagano Prefecture (13)

Katsunori Ueno and Yukie Ueno

ヤマトテンナンショウ (サトイモ科)

Arisaema longilaminum Nakai 写真1・伊那市高遠町藤澤 1300 m 2020 年 6 月 21 日
NAC198402

2019 年 7 月、ゴルフ場横のフェンス沿いに数株のヤマトテンナンショウが開花しているのを見つけた。翌年再確認のため現地を訪れて周囲を調べてみると、20 個体近く見られたものの、少し離れるとほとんど見られなくなった。ヤマトテンナンショウは腋部の先が長く伸び、付属体が細く長いなどの特徴と開花時期が最も遅いことにより、他のテンナンショウ類との区別は容易である。本種は長野県では軽井沢周辺と塩尻峠とに生育しており（上野・上野 2015）、今回の場所は塩尻峠からの連続的な分布域の東端にあたる。ヤマトテンナンショウは日本固有の植物である（加藤・海老原 2011）。

ベニシュスラン (ラン科)

Goodyera biflora (Lindl.) Hook.f. 写真2

・北安曇郡小谷村大字北小谷 300 m 2020 年 9 月 21 日 NAC198403

北向き急斜面のスギ林縁のところどころに果実をつけたベニシュスランがわずかに生育していた。葉はミヤマウズラ *G. schlechtendaliana* Rchb.f. によく似た小型のランで、葉の色がやや黒っぽい緑色で白い網状の脈が目立ち、また少し伸びた花茎に大きい果実が 1 個程度付く。通常は 7 月ころに開花する。近縁のアケボノシュスラン *G. foliosa* (Lindl.) Benth. ex C.B. Clarke var. *laevis* Finet は花茎がさらに短く、葉の色は明るい緑色をしている。長野県では県南部の天龍村、泰阜村に分布するが（長野県植物目録編纂委員会 2017）、それ以外の記録はなかった。Web 上に公開されている“レッドデータブックにいがた”（新潟県 2001）では長野県との県境付近に分布がある。また、岐阜県では南西部にのみ生育している（岐阜県植物調査会 2019）とされるが、

旧山口村（現岐阜県）にも生育しているのを確認している。富山県ではレッドデータブック（富山県 2012）に記載があり、いずれの隣県においても稀少な植物とされる。

写真1 ヤマトテンナンショウ 伊那市
2020 年 6 月 21 日写真2 ベニシュスラン 小谷村
2020 年 9 月 21 日

* 上野勝典・上野由貴枝

〒399-0011 長野県松本市寿北 2-2-38



写真3 ナガバノキソチドリ 王滝村
2020年8月29日



写真4 オオユリワサビ 須坂市
2019年5月4日



写真5 ミツバコンロンソウ 飯田市
2020年5月5日

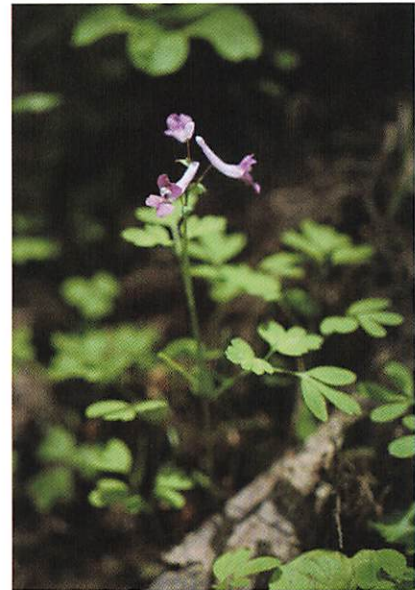


写真6 ジロボウエンゴサク 伊那市
2020年5月24日



写真7 イナトウヒレン 伊那市
2020年9月22日



写真8 イトバアワダチソウ 辰野町
2017年7月30日

ナガバノキソチドリ (ラン科)

Platanthera ophrydioides F.Schmidt var. *australis*
Ohwi 写真 3

・木曽郡王滝村御岳湖 1000 m 2020 年 8 月 29
日 NAC198404

薄暗い溪流沿いの急斜面にキソチドリの仲間と思われるラン植物が点々と生育していた。木曽谷で通常見かけるキソチドリよりも背丈がやや高く、花の数が多めで葉が細くて長い。標本の葉の幅は 1.4cm、長さ 7.1cm であり、通常のキソチドリの倍程度の長さがあった。花は側花弁がやや通常のキソチドリよりも太いように思われた。これらの特徴からナガバノキソチドリと同定した。里見 (1982) ではナガバノキソチドリを葉が線状狭楕円形～広線形としているが、遊川 (2015) ではオオキソチドリ var. *ophrydioides* とナガバノキソチドリを従来のキソチドリに統合してヒトツバキソチドリとしている。木曽谷ではキソチドリとの区別は容易であると考え、ここでは区別しておくことにした。清水編 (2001) によれば長野県では木曽町と大桑村での記録があるので、木曽谷南部には連続して分布していると思われる。

オオユリワサビ (アブラナ科)

Eutrema okinosimense Taken.

・千曲市冠着山 1220 m 2018 年 4 月 22 日
NAC198386

・須坂市大字仁礼 1000 m 2019 年 5 月 4 日
写真 4

・同市菅平 1300 m 2019 年 5 月 4 日
NAC198400

長野市の大塚孝一氏より、冠着山にユリワサビ *E. tenue* (Miq.) Makino の群生があるとの話を聞いたので、2018 年に現地を訪れたところ、北側斜面にオオユリワサビの大きな群落となっていた。また、同氏より須坂市の菅平にオオユリワサビらしき植物が生育しているという情報をいただき、2019 年の 5 月に行ったところ、たしかにオオユリワサビが開花直前の状態で確認できた。その後、下流域の宇原川にて川沿いを歩いてみると、オオユリワサビが群生して開花していた。葉の形状や大きさはユリワサビによく似ているが、太い花茎がやや這って立ち上がり、花がまとまって付く。根茎には鱗片葉が形成されていた。著者らの観察では、ユリワサビの花序の托葉の柄は長くなるが、オオユリワサビでは下部を除いてほとんど伸びない。長野県では信濃町 (長野

県植物目録編纂委員会 2017) の他、戸隠高原 (上野・上野 2018) で記録した。これまでユリワサビとして認識されていたものと思われ、特に県北部でユリワサビとされるものは再確認の必要がある。

ミツバコンロンソウ (アブラナ科)

Cardamine anemonoides O.E.Shulz 写真 5

・飯田市南信濃八重河内 1000 m 2020 年 5 月
5 日 NAC198405

道路法面近くの湿った地面に数株のミツバコンロンソウが開花していた。長野県では豊丘村 (長野県植物目録編纂委員会 2017)、根羽村 (上野・上野 2012)、大鹿村 (蛭間 2015) に記録があるが、きわめて数が少なく絶滅が危惧される。関東以西から四国、九州に分布する日本固有の植物である。(加藤・海老原 2011)。

ジロボウエンゴサク (ケシ科)

Corydalis decumbens (Thunb.) Pers. 写真 6

・伊那市高遠町藤澤 1300 m 2020 年 5 月 24 日
NAC198406

ゴルフ場脇の道路と斜面の境界付近にジロボウエンゴサクが小群落をつくっているのを見つけた。ジロボウエンゴサクはヤマエンゴサク *C. lineariloba* Siebold et Zucc. に似ているが、やや小型で、塊茎から複数の花茎、根出葉が出て、花茎の基部に鱗片葉が付かない。やや暖地性の植物で長野県では絶滅とされていたが、松本市 (大塚他 2006) で見つかった後、飯島町 (上野・上野 2007) でも見つかった。しかし、どの自生地においてもやや攪乱のある新規に造成されたと思われる環境であることから、外部から持ち込まれている可能性を否定できない。

イナトウヒレン (キク科)

Saussurea inaensis Kitam. 写真 7

・伊那市高遠町芝平 1300 m 2020 年 9 月 22 日
NAC198407

2020 年 6 月、高遠町のまばらなカラマツ林の林床で、イワウサギシダ *Gymnocarpium jessoense* (Koidz.) Koidz. が多く見られる蛇紋岩質の急斜面に、イナトウヒレンの根出葉が点々と生育しているのを発見した。葉は長細く濃い緑色で、光沢があり革質で硬い。わずか 20m 四方程度の狭い範囲に集中しており、周辺ではまったく見ることができなかった。どの個体も葉が 2 から 3 枚ほどしかない小さ

いものばかりで、周囲の状況からシカの食圧から強い影響を受けていると考えられる。開花期の9月に再来して花を確認できたものの、開花株はわずか3株しか見つけることができなかった。そのうちの1つは白い花弁をつけていた。イナトウヒレンは長野県では伊那市長谷、大鹿村(長野県植物目録編纂委員会 2017)での記録がある一方、国立科学博物館の標本・資料統合データベースでは、霧ヶ峰と高遠町で1920～30年ころに小泉秀雄氏によって採られたとする標本が検索される。これら科博のデータベースで検索された霧ヶ峰と高遠町の自生地は現在では不明であり、今回の場所は現在確実に自生の確認できるイナトウヒレンの北端にあたるとと思われる。本種は長野県固有の貴重な植物である。

イトバアワダチソウ (キク科)

Euthamia graminolia (L.) Nutt. 帰化 写真 8

・上伊那郡辰野町大字伊那富 1100 m 2017年7月30日 NAC198408

これまでに北米原産のシダ植物(上野・上野 2020) やツツジ類(上野他 2021) が複数発見されている場所において、葉が細長い線状で黄色い頭状花をつけた植物が複数本たっていた。図鑑(清水他 2001) からイトバアワダチソウと同定した。本種は日本では北海道に帰化しているとされるが、長野県では記録が無いようである。イトバアワダチソウも北米原産であることから、他の外来植物と同時に導入されたものと思われる。

謝辞

本報告の作成にあたり、オオユリワサビの貴重な情報と本文作成にあたり助言をいただきました長野市の大家孝一様には、心より感謝いたします。

引用文献

- 上野勝典・上野由貴枝 (2007) 新産地報告 (4).
長野県植物研究会誌 40: 233-236.
上野勝典・上野由貴枝 (2012) 新産地報告 (7).
長野県植物研究会誌 45: 43-46.

- 上野勝典・上野由貴枝 (2015) 新産地報告 (10).
長野県植物研究会誌 48: 75-77.
上野勝典・上野由貴枝 (2018) 新産地報告 (12).
長野県植物研究会誌 51: 87-90.
上野勝典・上野由貴枝 (2020) 長野県で見つかった外来シダの密生地. 日本シダの会会報 4 (34): 13-18.
上野勝典・上野由貴枝・米倉浩司 (2021) 長野県に帰化した外来のツツジ 4 種. 植物研究雑誌 96 (1): 57-61.
大塚孝一・小山泰弘・上野勝典・上野由貴枝 (2006) 長野県絶滅種ジロボウエンゴサクの松本市での自生確認. 長野県環境保全研究所研究報告 2: 119-121.
加藤雅啓・海老原淳編集 (2011) 日本の固有植物. 東海大学出版会.
岐阜県植物調査会 (2019) 岐阜県植物誌. 文一総合出版.
里見信生 (1982) ラン科. 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富城忠夫編 日本の野生植物 草本 I 種子植物. 平凡社.
清水建美 (編) (2001) 「長野県植物誌」補遺 (4). 長野県植物研究会誌 34: 63-70.
清水矩宏・森田弘彦・廣田伸七 (2001) 日本帰化植物写真図鑑. 全国農村教育協会.
富山県 (2012) レッドデータブックとやま. 富山県.
http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1709/kj00013513.html.
長野県植物目録編纂委員会 (2017) 長野県植物目録. 長野県植物目録編纂委員会.
新潟県 (2001) レッドデータブックにいがた. 新潟県.
<https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/kankyokikaku/1214240790991.html>.
蛭間啓 (2015) 長野県南部地域における特筆すべき植物の分布記録. 長野県植物研究会誌 48: 67-70.
遊川知久 (2015) ラン科. 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司編 日本の野生植物 第1巻. 平凡社.